

寄稿

知ってほしい

わが愛しの偉星人

その63

偉星人と言葉

偉星人には言葉を操るタイプとそうでないタイプがいる。4歳すぎても言葉を発さない息子に、何とか言葉を習得させようと、VOCA（ヴォカ）という最新の機器を使い、支援してみた。ママの顔写真のボタンを押すと「ママ」と音声が出る仕組みだ。彼は、実際のママの顔とその機械の発する「ママ」という音声の関連に、すぐ気づいたようだ。

それで1つ1つの物に名前が存在することを知った彼は、自分の欲しい物の音声を出すと、それが相手に伝わることも学習したのだ。

ところが、すぐに壁にぶち当たった。「あした」とか「あっち」とか「さっき」とか、写真に撮れないものを教えることができないのである。「あちから、あまいにおいがするね」なんてなんてことのない会話の「あっち」も「あまい」も「におい」も、彼とは伝え合う手立てが無いのである。…それなら彼のわかる範囲内で最大限にコミュニケーションを取ってあげればいけないか。前向きな気持ちで、1つ1つ確実に伝わる言葉のみを用いて、日々ゆっくりとコミュニケーションを行っている。

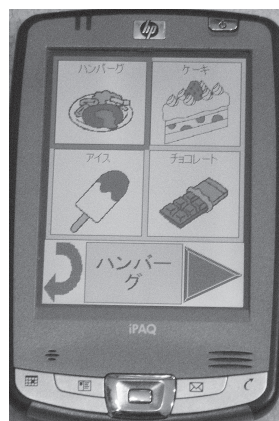
一方、覚えて欲しくない言葉も時には習得してしまうことがある。学校で友達が口にした言葉、テレビの戦闘シーンで人と人が傷つけ合うシーンの言葉…「その言葉によって、相手がどんな動きをしたのか」を頼りに発するのである。意味を持たない言葉をオウムが繰り返す、そんな感じだ。

息子は自閉症の中でも、人懐っこい積極的なタイプである。なので、人と関わりたい時に、気をひくための「道具」としても言葉が利用されるのである。「〇〇さんたたくよ～～」という音声を発すると、必ず誰かが「だめだよ！いけないよ！」と答えてくれる。実際に自分が発してみた時に、相手が動いてくれたりすると、ますますその言葉は効果を増す。そんな風に、言葉の使い方を誤学習してしまうのである。

支援者が一生懸命、躡けようとすればするほど、問題発言がエスカレートしてしまう構図ができ上がってしまうのだ。親が最も恐れている光景である。

言葉が出ればそれでいい、というものではないのだ。

…本当に彼が必要とする言葉を、最低限でいいので確実に伝えることができるようになるのが今の目標である。



VOCAの1例



※編集にあたり、加筆・修正しております。

(下諏訪地区障害を持つ親の会 会員)

